

その年の夏は地球全体がおかしかった。
ブラジルでは全く雨が降らずアマゾン川が枯れ。
アフリカでは大雨による洪水が発生。
カナダでは記録的な酷暑となり森が燃えた。
新宿の路地裏にいたふたりは何も知らずにいた。それが誰も知らない世界での冒険になる事を。

街頭モニターは普段の映像ではなくブルースクリーンに何かの文字列を表示し、照明や街灯がいたずらに点滅している。道行く人々のスマートフォンからは発信者の分からない着信音が鳴っていた。

日野 勇太小学6年生。この日勇太は1つ歳上の従兄持田 叶と怪獣のオブジェを見るために新宿に来ていた。
「今日って何かトラブルでもあったのかな？」
「よく分からないけど、電車とかにも影響しないといいけど。
それにしてもなあ勇太もガキだな。小6にもなって怪獣なんてな」
「またあ言う。いいじゃん。今度アメリカで映画するし、去年はなんかハリウッドで賞とかあ！」
「わかった。わかった。って早く見て行こうぜ。あんまここない方がよさそうだしな。」
周りを見渡すと勇太達の年齢からすると萎縮してしまうような雰囲気の人々がいる。それを遠くから見守るような監視するようにいる数名の警官が異質さを感じさせている。
恐らく叶は自分達…勇太に危害がないか心配して、できればここから早く去りたいのだろう。

集まっているようで、無造作に散らばっている集団の中で着かず離れずだが距離があると感じさせるところひとり座っている少女に勇太の目は留まった。

同じクラスの鬼塚 光であった。

光は小学2年生の冬に勇太の通う学校に転校してきた。

転校してきた当初から光の印象は一貫として【孤立】だった。

ひととは必要最低限しか関わらず、他人が話しかければ邪険に扱い、嫌味のひとつでも言われれば次には「バカ」「役立たず」「目障り」と10の罵倒で返す。

滅多に笑わず、笑うとすれば他人を馬鹿にするなどマイナスの印象を与えるものばかりだった。

当然の事ながらそんな彼女は周囲からの攻撃対象となっていた。

罵倒や無視、いたずら時には直接的な暴力を光は曝された。

勇太には彼らがからかいなのつもりなのか分からない罵倒の言葉は分からなかった…恐らく発している彼らも半分も分かっていないだろう。

だが、彼らの正当性の薄皮を張り付けた攻撃に明確に言語化はできずとも勇太は憤慨していた。

光本人はそんな時には何も感じていないような感情の何もない表情をしていたが勇太にはそれがただ悲しい顔をする以上に心が締め付けられた。

仲裁に入る事もしばしばあったが、光はその事もまるで関係ないように孤立を貫いた。

そして、6年生の頃にはクラスに顔を出すこともなくなっていた。

どうしてるのだろう。大人は話を濁すばかりで教えてくれなかった。

その彼女が目の前にいた。勇太は積極的に女子に話しかけられるタイプではないが、目についた時には叶の「おい、危ないから近づくな」という言葉も耳に入らず反射的に近づいて話しかけていた。

「あっ…えっと鬼塚…さんだよねっ俺同じクラスの…「っ…誰あんた？なにナンパ？キモ…話しかけないで…」

掛けた言葉を遮られてしまい勇太は動揺したがなんとか言葉を続けようとしたが、「「ああ！ああ！だから！ウザいし話しかけんなって言ってんのが分かんないの！殺すわよ！」

「…」

取り付く島もない。そういえばこんな感じであった。ちょっと前までの事だったのに完全に忘れていた。

「っ…っ」

光は不安定なスマホをなんとか動かそう勇太に目を合わせないようもしない。周囲の嘲笑と叶の言わんこっちゃないとい視線に勇太の顔は赤くなっていた。なんとか話しかけられないか言葉を考えていると視界が急に暗くなった。

先ほどまではなかった黒く厚い雲がいきなり空を覆っていた。

「つめっ…！」

鼻先に当たったものが勇太は瞬間理解できなかった。雪である。

たまにニュースで観る雪ではない。冬に降るようなしんしんとした雪である。

「ええ嘘だろ…地球温暖化ってやつなのかな」

奇妙さと不安そして非日常への興奮が混じった声で勇太は呟いた。

対照的に従兄は不安そうな顔で空を見ている。

「…？」

雪と雲ののあいまに何かが見えた。

光の卵だった。鼓動している。今にも孵りそうだ。

音がする重低音のラッパのような轟音がどこからか聞こえてくる。

「なに…あれ…」

流石に光もスマホから目を離し空を見上げていた。

光の卵の鼓動が早くなると共に周囲の物が浮かび上がりはじめた。

引っ張られるように勇太と光の身体も浮かび始めた。

「日野君!!!」「鬼塚さん!!」

卵に引っ張られる光を勇太が掴もうと手を伸ばす。

「やめろ!勇太!!こっちに来い!!!」

勇太が従兄を見ると手を伸ばしている。従兄も宙に浮いているが黒い衣装を身にまとった人物に抑えてもらっている。

確かにこのままじゃ自分が危ない従兄の方に勇太の意識が向く。

「日…勇太!…誰か助けて!」

「っ!」

勇太はすぐに振り返り光にに手を伸ばした。

なんとか手を掴んだが宙に浮くまいと掴んでいた電灯も卵に吸い込まれて支柱から抜けてしまった。

「うわああああああああああああ」

卵に吸い込まれる、目の前に光が溢れたと思ったら次には幾つものスクリーンに様々な景色が映し出されているような光景が目に入った。

月面にある電話ボックス。海を走る電車。シルクの糸の上に立つバザール。核の焚火。怒りに満ちた顔でクッキーを焼く肉塊。常に変動するキャンバス。米国尊厳維持局の週末映像。

身体は幾つも回転し意識が遠のく。ただ握った手だけは確かに掴んでいた。

意識が遠のきそのまま消えていった。

「ここは…。」

鬼塚 圭吾が目覚めたのはは見知った自宅リビングであった。

なぜ今のような言葉が出たのか、それは、圭吾が目覚めます前の最後の記憶。

道路を外れ、娘の鬼塚 光に突っ込んで来る車から庇ったところで記憶が途絶えていたからであった。

圭吾はあの事故で自分は死んだと確信していた。

「夢だったのか…。」

「圭吾…？」

「秋子さん？」

声を掛けてきたのは妻の秋子であった。

秋子は信じられないものを見て戸惑っていたが、徐々に顔を崩しながら近づいて来た。

「あっ…」しかし、あと一歩のところまで戸惑っていた。

「?どうしたんですか…？」

圭吾は状況が呑み込めずにいると秋子の後ろから更に声が聞こえてきた。

「パパ…ママ」

「ひか…どうして、あなた…だって今、小学校6年生じゃ…」

秋子が戸惑いと怯えるような表情で光を見ていた。

圭吾には分からなかった、どうして娘を見て怯えているのか、娘は見慣れた5歳の姿でそこにいた。

「パパ!ママ!」

「あっ」

飛びついてくる光を秋子は反射的に屈んで受け止めていた。

そのまま光は圭吾と秋子を一緒に抱きしめた。

「おふ…どうしたんだい?いつもより甘えん坊…で」

瞬間、情報が流れ込み、圭吾と秋子は今の状況を一部を除き理解した。

圭吾はあの日、自分が死んだ事、秋子と光の顛末、光が自分を蘇えらせ、秋子を現実世界から呼んだ事を、この世界は光が用意したものであると。

しかし、光が変わりに犠牲にしたものやデジモンについては知りえなかった。

それは、光が3人だけの世界、幸せの世界に引き籠るために敢えて伝えなかった。

圭吾の記憶の処理が終わり改めて光を見るとそこには小学校6年生の成長した光がいた。

鼓動が鳴り響く、オグドモンの中心のコアになる部分でガルフモン光達がいる幸せの世界を抱きしめるように静かに座っていた。

「というか何で俺がその選ばれし子どもって思ったわけ？自分で言うのもなんだけど俺ってそんな特別な感じがあるわけじゃないし…」

「だって勇太が持ってるのデジヴァイスだろ？それを持ってるって事は選ばれし子どもって事じゃん！」

デジヴァイス？ヴォーボモンの指摘に手を見ると手には身に覚えのない機械が握られていた。

「なんだこれ？」

機械には楕円形にアンテナがついている。父さんや母さんが使っていたウォークマンに似ているかもしれない。

「あれ？でもこれ全然動かないじゃないか」

中心にはディスプレイ画面のようなものが見えるがボタンを触っても振っても起動しない。よく見るとちょっとヒビも入っている。

「ヴォーボモンこれ壊れてるんじゃない？」

それは勇太が本当に選ばれし子どもなのかという疑問でもある。

「分かんないけどこういうものなんじゃないの？ぼくだってはじめて見るもん？」

「…？じゃあなんでこれがデジヴァイスって分かったの？」

「？そんなことすぐ分かるよ！細かいなあ！勇太は！とにかく勇太は選ばれし子どもでぼくといっしょにデジタルワールドを救ってもらいたいんだよ！」

「というかその救うってのがそもそも…」

「きゃああ!!!!!!!!!!!!」

少女の劈くような悲鳴が響いた

畳みかけるように降りかかる珍事に気を取られて一緒にやって来たであろう少女の存在を忘れていた。

「勇太！」

悲鳴の方向に勇太は駆け出していた。続いてヴォーボモンも走ってついて来る。鬱蒼とした森を走る事で草木が引っ掛かりところどころ切れている感覚があったか気にしている場合ではないと勇太は足を進めた。

「勇太この悲鳴って!？」

「きっと鬼塚さんだ！俺と同じ人間の女の子でクソ！すぐに探すべきだったんだ!!」

「まずいよ勇太！最近ここも危ないデジモンが現れたりするんだ!!」

やっぱり見た目どおり危ない奴もいるのかよ！勇太は足を早めた。

声の元へ近づいてくる。

いた！特徴的な銀髪。うずくまっているが間違いなく鬼塚 光だった

脅えている彼女の傍らに今に襲いかかりそうに見える赤い恐竜のようなデジモンがいた。

「その子から離れろおっ!!!」

「勇太！ぼくに任せて！プチフレイム!!!」

ヴォーボモンが勢いよく火球を吐き出し赤いデジモンに命中させ吹き飛ばした。

やっぱりこいつら危ないじゃ…そんな場合じゃない！

「鬼塚さん大丈夫!？」

「あんた…日野!?どこいったのよ!!???あんたに話掛けられたら空飛ばされて！訳わかんない森の中に飛ばされて!!変な赤い化物に話しかけられて

!!???全部あんたのせいよ!!!!バカ!!カス!!クズ!!!バカバカバカバカ!!!!クソ野郎!!!!!!!」

「…勇太ほんとにこの子で合ってる？」

「ははは…」

元気そうでなによりだ…見たところ怪我もないようだった。

半泣きでキャンキャンと吠える光と不信の目を見るヴォーボモンを横に勇太は自分を納得させた。

「…というか…え？話しかけられた…？だけ？」

「いきなりなにするんだよ！」

先ほどヴォーボモンが吹き飛ばした赤いデジモンが起き上がった。

「お前達まさか選ばれし子どもの光を狙ってるの!?ギルモンそんなことさせない!!」

赤いデジモンのギルモンが勢いよくヴォーボモンに飛びかかった。

「ギルモン知ってるお前ヴォーボモンだろ！みんなに飛べないって馬鹿にされてるからってひとを困らせたらダメなんだよ！」

「飛べない事は関係ないだろ!!というかギルモンが光を襲ってたんだろ！お前こそ悪い事してるんじゃないか！」

「ギルモンそんな事してないもん！ヴォーボモン嘘つき！」

「嘘つきはギルモンだろ!!」

売り言葉に買い言葉で取っ組み合いの文字通り怪獣プロレスとなってしまった。

言っていることを聞くにギルモンも悪いデジモンではなさそうだ。仲裁に入ろうか危ないし見守ろうか逡巡し光の方に目をやった…

怯えている…それも先ほどの恐怖をはまた別の雰囲気があった。目の焦点が定まらず両肩を抱えるような何かに耐えるような姿に見えた。

「…お前達やめろ！」

勇太はヴォーボモンとギルモンの間に入った。

お互い目がけて放ったパンチが間に入った勇太の顔面へと双方当たった。

「ぶゝへゝ」

なんとも情けない勇太の声によりこの喧嘩は終わった。

「…泣いてんじゃないわよ男のくせにザコ」

「泣いてないよちょっと涙が出ただけだよ…」

「ごめん勇太…」

「ごめんなさい…」

喧嘩も終わり落ち着いた段階で聞いた話をまとめる事となった。

「じゃあ光も選ばれし子どもでギルモンは光のパートナーってこと？」

「うん！ギルモン光のパートナー！」

光に抱き着こうとするギルモンを突き飛ばす。だがあまり力がないせいかただ押しのけたようにしか見えない。

「近づくんじゃないわよ！うっというわね！バカ！」

「鬼塚さん怖がらせちゃだめだよ」

静止した勇太の後ろにギルモンが小さく丸まって光の様子を見ている

「…何よ…あんた化物の味方するの」

「そんな言い方ないだろ。不安な気持ちは分かるけど落ち着いて。俺達だってこの世界の事は何にも分からないんだ。ひと？だっていないしとりあえずでもヴォーボモン達と一緒にいたほうがいいだろ？大丈夫！俺も一緒にいるしなんとかなるさ！」

「…あんたちょっと楽しんでない？」

「ソナナコトナイヨ…」

光の指摘は合っていた勇太はこの状況に興奮していた。特撮ドラマが好きでこういった非日常の冒険に憧れがあった。

「どうだか…」

「それでこの島の異変って？俺達に何やらせようってんだよ」

「うん。最近色んなデイモンが変なんだよみんなどこかに行ったかと思えばいつもの場所に居て人形みたいに同じ行動したり連れ戻そうとしたデジモンを攻撃したりするんだ。いつも頼ってるデジモン達も最近この島に邪悪な気配が漂ってるって。そんな時、噂が流れたんだ。昔こういうデジタルワールドに異変があった時選ばれし子ども達がやってきてパートナーデジモンとデジタルワールドを救ったんだって、選ばれし子ども達は勇太達が持ってるデジヴァイスを持ってる僕たちデジモンを進化させて一緒に戦ってくれるんだ!」

勇太達は持っているデジヴァイスに目をやる。ほんとにそんな力があるのだろうか…「というか何よ進化って…進化って何万年もかかるって前おばあちゃん家の本で読んだんだから!嘘つくんじゃないわよ!」

「嘘じゃないよ僕達は強くなったりすると姿が変わって進化できるんだよ」

うんうんと勇太の後ろのギルモンも頷いている。キッと光に睨まれまた勇太の後ろに隠れてしまった。

「私嫌よ…なんで関係ない私がこんな奴らのために戦わなきゃいけないのよ!私は帰りたいの!!こんな訳わかんないところにいたくないの!元いたところに返して!!!どうにかしてよ!日野!!!???」

光は蹲り肩を抱え掻きむしりヒステリックに叫んだ。

「落ち着いてって鬼塚さん俺も訳わかんないんだよ…さっきも言ったけど俺達はここ
の事分からないし、それに異変を解決するために呼ばれたなら異変を解決すれば帰れるかもしれないだろ。」

「…勇太！」

なんとか光を勇太が宥めようとした時、近くから爆音が聞こえた。

「気を付けて！光！勇太!!この臭い！フライモンだよ！」

森の中から爆音を鳴らし、蜂と蛾が混じったような巨大なデジモンが現れた。

「あれがヴォーボモンが言った危険なデジモンか!？」

巨大な金切り音のような鳴き声と耳障りな飛翔音鳴らしながらこちらにフライモンは突進してきた。

「きゃああああ!!？」

「危ない!!」

巨大な前足の爪で光を切り裂こうとするところ寸前で勇太が抱き抱えて躲した。

「ファイアーボール！」

「プチフレイム！」

ヴォーボモン達が火球を吐き出す。だが火球は当たってもフライモンが少し怯んだだけでダメージがあるように見えなかった。

「全然効いてない!？」

「フライモンは僕達より進化してるんだ！」

「それじゃあこっちも進化すれば!どうすればいいんだ!？」

「分かんないよ！」

「役に立たないわね！」

「なんとかならないのかよヴォーボモン！」

「なんとかって分かんないよ！」

ヴォーボモンとギルモンの攻撃を何度も当てるが全く効いてるようには見えない。

「勇太！危ない！」

ヴォーボモン達を相手にしたフライモンが勇太達に向かってきた。

「きゃああああ!!!なんで!!!?なんでよ!!!??？」

恐怖で足が動かない。だけど…！

勇太は光を抱きしめてなんとか庇おうとする。その時鈍く勇太のデジヴァイスが光を放った。

「プチフレイム!!」

先ほどよりも強力な火球がヴォーボモンから放たれる。フライモンの体勢が崩れる。フライモンの前足が勇太を翳める。ヴォーボモンの火球によりなんとか本来の致命傷を防いだ。

「あ…がぁあぁあぐずっ…」

痛みで涙が出る。目を開け相手を見なければ次こそ殺されるかもしれない。だが、痛みで身体が思うように動かず物理的に開けようにもできない。

翳めた方が炎症と流れる血で熱くなっているのが分かる。

「いや!いや!いや!!血が…!やめてよ!!死なないでよ!!怖いよ!ひとりにしないでよ勇太!!やだ!やだ!!助けてよママ…ママぁ!!!!!!」

光も動揺でパニックになっている。

「勇太!光!」

「ギルモンがなんとかする!光助ける!」

ギルモンが勢いよくフライモンに飛びかかるがすぐに払いのけられてしまう。

「まずい!また勇太達の方に!!勇太逃げて!!」

「ひゝ…かゝりゝ」

ヴォーボモンの声で危険が迫ってるのが勇太には分かったが、体が動かない…反射的になんとか光だけでも覆い被さり守ろうとする。

「やだ!やだ!やだ!!死にたくない!!!!死にたくない!!!!!!なんで私だけ!!!!私だけこんな目に!!!!!!!!」

光の絶叫と一緒に光のデジヴァイスが大きな光を放った。そして、ギルモンの身体も光を放つ。

「ギルモン進化！」

ギルモンの身体が光に包まれテクスチャのように皮膚が剥がれフレームのようなギルモンの骨格が露出し、変身…進化をする。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝデビドラモ

ンツツツツツツツツツ!!!」

ギルモンから進化したデビドラモンは黒い肌に長く伸びた強靱な腕に赤く鋭い爪。そして4枚の羽根と尻尾。それは禍々しい姿とだった。

「デビ…ドラモン？」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!!!!!!!!!!」

雄叫びをあげながらデビドラモンがフライモンに飛びかかる。がっちり強靱な腕で翼を捕まえフライモンは振り払おうにもできないようだ。

そのまま翼を引き抜き、地面に叩きつける。

フライモンは衝撃で痙攣し動けないでいる。そこに間髪入れずデビドラモンは鋭い爪で切り裂く。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「もういい!やめろ!デビドラモン!!」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!!!!!!!!!!」

勇太の静止も聞かずデビドラモンは攻撃…蹂躞を続ける。

ヴォーボモンが火球をデビドラモンに当てる。

火球に当てられて冷静になったのかデビドラモンの動きが静止する。そのままフライ

「うゝうゝうゝ」

ヴォーボモンもこちらに寄って来るがデビドラモンに対して意識を向け警戒をしてい

勇太はヴォーボモンに目線を向け、デビドラモンの方に目を見直す。唾を呑む。光

「あ…ありがとう。デビドラモン…」

デビドラモンが軽く吠える。やっぱり食われ…そのままデビドラモンは跪くように頭

「うゝうゝうゝ…」

デビドラモンに促されるように勇太は頭を撫でた。

どうやら喜んでいるようだ。

「勇太は肩大丈夫？」

「っ…うぐ…ひぐっ」

「ひっ!なにこの化物!!?やめて!離してこんなの近くに寄せないで!!!!」

光は勇太を引き剥がし、デビドラモンに近くにあった石を投げつける。

「ちょっと光やめなよ！」

ヴォーボモンが宥め、デビドラモンは勇太の後ろに隠れて唸りながら怯えているようだった。

「とにかくそいつこっちに近づけないでキモい!!!」

「う`う`…ひ`か`り`」

悲しそうにデビドラモンは唸っている。

どうすればいいのだろうか。ただ今は落ち着ける場所に移動したほうがいいだろう。

「とりあえず、移動しようか。ヴォーボモンどこか町みたいなとこない？」

「それなら、僕が普段いる町のストレジシティに行こうよ。遠いけど安全だし噂を話してくれたデジモンに詳しい話を聞いてみよ。」

「そうだな…ほら行こう鬼塚さん。」

「なんで…私ばかりこんな…スマホも圏外だし役に立たないし…クソクソクソなんで…」

ぶつぶつ呟く光の手を引き勇太、ヴォーボモン、デビドラモンは歩き始めた。

これがふたりのとても長くて短い夏休みのはじまりだった。